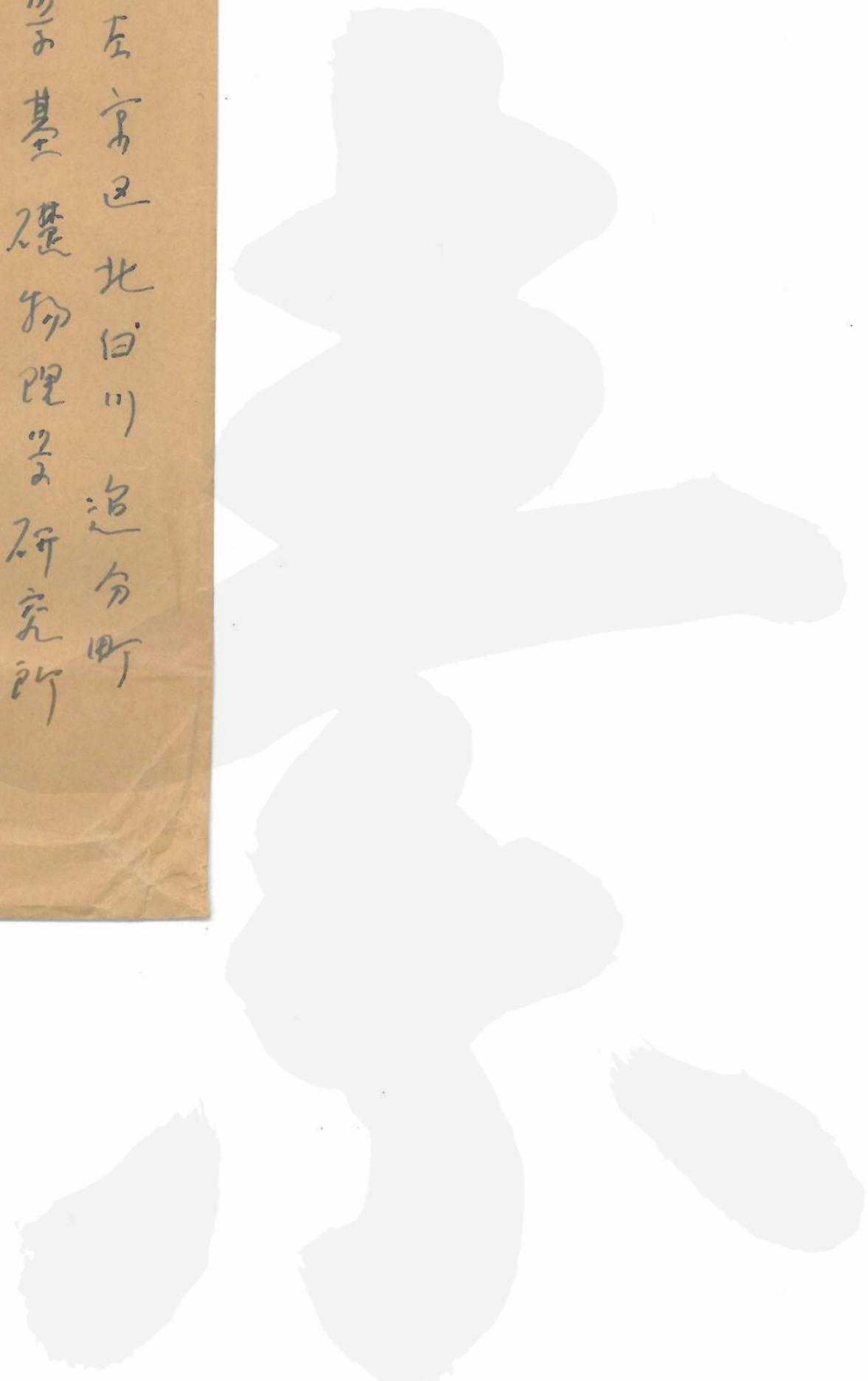




京都市左京区北白川追分町
 京都大学基礎物理学研究所
 湯川秀樹 様

©2022 YHAL, YITP, Kyoto University
 京都大学基礎物理学研究所 湯川記念館史料室

c091-006-030



昭和
年
月
日

東京都目黒局区内
東京都目黒区駒場町八六五

東京大学教養学部

電話渋谷(46)代表六、一四一(七)

野上茂吉郎



アジア科学者会議の可能性について

—— 一つの思考実験 ——

(この報告は素粒子論グループ日中交流委員の協同作業
 によってつくられた。)

この報告の中で「アジア科学者会議」についての一つの思考実験
 を試みようと思う。

このような会議は現在では思考実験の段階に止っているが
 全く架空なものではない。

オイに、科学者京都会議がパグワオツシュ運動の精神に
 よって日本国内での活動を考える場合にも、問題は国の内部のみ
 では閉ざらないで、アジア諸国に向けての働きかけが必要に
 なると思われる。

オニに、アジア諸国は欧米やソ連とくらべると小国または後
 進国であつて、そのために、アジア科学者会議は、世界的規模で
 のパグワオツシュ会議がいままで真剣にとり組んでこなかった
 重要な問題を考える場として大切であらう。

オ三に、作家や芸術家はすでに A・A 作家会議を何處か
 実現している。また、最近、世界科連の線では、中国、日本、朝鮮、
 パキスタン、インドネシアを含む科学者会議が中国の提案によつて
 構想されつつあるようである。

このような思考実験の目的は、一つにはそのような会議の実現の
 可能性を検討することであり、二つにはこの考察を通じて、パグ
 ワオツシュ会議や科学者京都会議の将来進むべき新しい可
 能性を考え、同時に、それらの会議のもつてあろうとする自然
 な限界についても考えようということにある。

アジア科学者会議を想定するに当ってわれわれの当面すると思われ、向題桌を討議の準備のために以下に列挙してみよう。そのうちのあるものについては竹原氏の会議でわれわれの結論についても詳しい報告をする予定があるが、またあるものについては、向題の難しさのために単なる向題の指摘に止まらざるを得ないと思う。また、われわれの力不足のために、アジア諸国の中で中国以外についてはかなりデータの裏づけのない推定による考察以上には出られないことをおことわりしておきたい。

1. アジア諸国の科学者のおかれている環境の相違

パグワオツシユ会議では、現時点での国際平和運動における科学者の特殊な役割りについて指摘されている。この指摘は原則的には眞実であるが、アジア地域という科学・技術における後進地域に当はめるとときにはいくつかの省察が必要をほとんどして考えるべきであろう。この補正を求めるとは、この地域での科学・技術の発展段階に関する基本的なデータが必要になる。同時にまた、アジア各国において科学者がどのような社会的地位をもち、科学がどの程度に社会的制度になつていゝかをしらべることにも必要である。これについて

(i) 中国その他の諸国での自然科学の発展段階

中国における原子核エネルギーの開発状況

(ii) 中国その他の諸国での科学者の社会的地位

などについて報告を用意する。

2. 科学と科学者のあり方についての意識の多様性

科学者のおかれた客観的条件的もつ矛盾の多様性に後つて、科学というものの捉え方や科学者のあり方についての意識にも多様性が見られる。科学研究のもつ中立的性格と政治的性格など、日本と中国についての比較、

3. 科学者の国際交流の原則

科学者の国際交流は従来、科学の中立性、科学者個人の中立的な立場についての諒解にもとづいて行われてきたことが多かった。また国際交流の原則をうたう場合にも相互の対等な立場の尊重など、「互に犯さ合わない」という消極的な姿勢が強調されてきた。これに比べて、パグワッシュ会議は「共通の現状認識にもとづく科学者の連帯感」という積極的な交流の姿勢を打ち出していることは強調に値する点である。

4. アジア科学者会議の可能性

パグワッシュ会議の科学者たちの連帯感を支えているものが、アインシュタインの原則であり、その原則を貫くという責任感であるとする、これと矛盾せず、しかもアジアの科学者たちを結ぶには是れより切實な^に現実を反映した原則が求められるべき点に注意する。